

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：～炭鉱(ヤマ)のくらし・マチの記憶～

「炭鉱文化」集積継承・交流促進事業

事業者名：釧路市立博物館

住所：085-0822 北海道釧路市春湖台1-7

TEL：0154-41-5809

FAX：0154-42-6000

HPアドレス：<http://www.city.kushiro.hokkaido.jp/>

連携事業者名：夕張地域史研究資料調査室／常磐炭田史研究会／いわき市石炭・化石館／田川市石炭・歴史博物館／志免町教育委員会／大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ／大牟田市石炭産業科学館

会場：釧路市立博物館 1階マンモスホール

事業期間：平成22年5月1日～平成23年3月15日



1. 館の使命と本事業の関係

当館の使命は、釧路地域及び周辺地域の自然や歴史に関わる調査・研究を通して、地域の特性を明らかにし、地域に住む人々に活用可能な情報を発信していくことである。

石炭・鉱物・森林・水産などの「資源」は、開拓地であったこの地域の成り立ち、将来を考えるにあたって重要な要素である。まちづくりは、地域史に学ぶことが不可欠である。石炭について、当市は北海道最初の石炭採掘地であり、現在もわが国唯一の炭鉱がある。製紙・水産とともに「三大基幹産業」として、多くの人々が携わり、有形無形の歴史がつくられてきた。博物館では石炭産業にかかわる各種事業をこれまでも行ってきたが、本事業では博物館がこれまで以上に情報集積・発信の場となるべく、市民協働での活動を行い、その使命をさらに果たすべく展開する。

2. 企画内容

①事業目的

産炭地はおもに、北海道、常磐、九州北部・山口地区に分布し、過去を振り返れば地域間で技術者の行き来が頻繁に行われていた。また、地域に結びついている労働者は、それぞれ独自の文化を形成した。

これら炭鉱文化の地域性と普遍性を明らかにするよう、研究を含め博物館の活動基盤を形成するよう、平成21年度に引き続き、これまで行ってきた産炭地博物館「地域間連携」をさらに深化・拡大させ、地域内では「ヤマの記憶」を博物館が核になり炭鉱経験者と市民が共有し、次の世代へ引き継ぐことを使命とする「学び合いのネットワーク」構築と発展を目的として事業を行った。

②事業概要

全国6炭田の博物館等・同支援組織の連携により、展示内容を共同制作しての「全国炭田交流企画展」を開催した。あわせて、各炭田に残されている映像資料を活用した「炭鉱映画祭inくしろ」、連携館等から学芸員や関係者を招聘しての講演会・フォーラムの開催によりさまざまな角度・手法で、炭鉱の地域性と普遍性を明らかにする事業を展開した。

また、釧路地域の石炭産業史の記録は写真集制作（平成21年度の文化庁支援による）などがあるが、オーラルヒストリーの取り組みはあまりされてこなかった。写真や社史等では伝えきれない歴史、炭鉱の仕事と暮らしを伝えることを目的として、市民から寄せられる情報と要望を取入れ、3回の「ヤマの話を聞く会」の開催と、経験者の聞き取り、FMくしろとの共同企画「ヤマに生きて」の放送を通じ、記録化（冊子制作）を行った。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

①全国炭田交流企画展「炭鉱(ヤマ)のあるマチ」～地域性と類似性を、各産炭地からの発信で～巡回展ではなく「交流展」として、地域発の視点で、連携各館・団体が、各地域の炭鉱とその文化を写真と解説パネルを中心に紹介した。全国炭田交流企画展として、原則同時開催とした。
期間：平成22年12月18日(土)～23年2月13日(日) (毎月曜と祝日、12月31日～1月5日休館)
会場：釧路市立博物館 1階マンモスホール(無料) 期間中入館者数：2,392名
共催：太平洋炭硯管理職釧路倶楽部 後援：太平洋退職者・離職者協議会／釧路産炭地域総合発展機構／北海道新聞釧路支社／釧路新聞社／NHK釧路放送局／FMくしろ

* 交流企画展開催会場

アディーレ会館ゆうばり(石狩炭田)／いわき市石炭・化石館(常磐炭田)／田川市石炭・歴史博物館(筑豊炭田)／志免町中央公民館(糟屋炭田)／大牟田市石炭産業科学館・万田炭鉱館(三池炭田)

②「炭鉱映画祭inくしろ 2011」

日時：平成23年1月23日(日) 午後1時30分～4時15分 会場：釧路市立博物館 1階講堂(無料)
釧路炭田(太平洋炭硯)、石狩炭田、常磐炭田、筑豊炭田、三池炭田のほか、釧路の炭鉱マンが指導を行っているベトナムの炭鉱を記録した作品を上映した。

③フォーラム「炭鉱(ヤマ)から学ぶこと～歴史をたどり、ふたたび結ぶ～」

日時：平成23年1月30日(日) 午後1時30分～4時30分 会場：釧路市立博物館 1階講堂(無料)
炭鉱と、その社会が育んだ歴史や文化。それぞれの地域からの発信で、産炭地の地域性と類似性を考え、その記憶継承について学び合うことを目的として開催した。

<講演>【常磐炭田】「フラガールと炭鉱産業の転進」常磐炭田史研究会 事務局長 野木 和夫

【石狩炭田】「石狩炭田の開発と炭鉱社会の形成」夕張地域史資料研究調査室 代表 青木 隆夫

【筑豊炭田】「全国産炭地から見た筑豊炭田の特徴」田川市石炭・歴史博物館 学芸員 福本 寛

<フォーラム> 講演者+太平洋炭硯管理職釧路倶楽部 副会長 佐藤 富喜雄

④「ヤマの話を聞く会」

第1回 平成22年5月30日(日)「海底下への挑戦・SD採炭の完成」高崎守(元 太平洋炭硯)

第2回 平成22年9月25日(土)「労使が語る太平洋炭硯」小西新蔵(元太平洋炭硯労組)・高崎 守

第3回 平成22年11月28日(日)「我が青春の雄別炭硯」三輪紀元・松下泰夫(元雄別炭硯)

(2) 参加者の数

参加者人数 延べ 2686 人

内 訳：全国炭田交流企画展「炭鉱(ヤマ)のあるマチ」期間中入館者 2392 名

「ヤマの話を聞く会」第1回 50 名 第2回 40 名 第3回 64 名

「炭鉱映画祭」 94 名

フォーラム「炭鉱から学ぶこと」 46 名

(3) 事業により作成した印刷物等

①「ヤマの話を聞く会」記録集の刊行

発行 平成23年3月15日(火)・A4判104ページ・1,000部(刊行費は本支援事業による)

内容 「ヤマの話を聞く会」3回およびFMくしろ「ヤマに生きて」から採録

市内外の図書館、大学、研究機関、市内小中学校等に配布。3月26日(土)から一般配布開始

②全国炭田交流企画展告知のためのチラシ(1,000部)・ポスター(200部)

海底炭鉱で働いた当時の状況や思いを赤裸々に語る高崎さん（右）

太平洋炭礦の機械化、労使関係…

ヤマの記憶、後世に

釧路市博物館
第1回「聞く会」

元社員が体験談

元炭鉱マンを講師に招き、釧路における石炭産業の歴史や意味を見つめ直してもらう「釧路市博物館」の連続講座「ヤマの話」が30日、開講した。同館での第1回講話は市民約50人が参加し、戦後の炭鉱の過酷な状況や、安全採掘の確立に向けた関係者の取り組みについて話を聞いた。

講話を務めたのは太田が集められた現場で、平洋炭礦の社員高崎守さん(8)。高崎さんが入社翌目の1949年に雇われた海底炭鉱の開採には「クスの人」と呼ばれ、職場で厄介者扱いされていた人や、上司はつきり物を言うことで陳れていた管理者、学校を卒業したばかりの若者など

落盤事故や危険性などが集められた現場だったといふ。

高崎さんは各地の炭鉱では「理屈で待てば悪化する」と抵抗する慣習をもった炭鉱では進まなかったが、太平洋炭礦では労使ともに柔軟な対応をすることでできた」と背景を説明。その上で「クスの人」といふ、枠にとられない人たちの

高崎さんは「理屈で待ちが悪化する」と抵抗する慣習をもった炭鉱では進まなかったが、太平洋炭礦では労使ともに柔軟な対応をすることでできた」と背景を説明。その上で「クスの人」といふ、枠にとられない人たちの

集まりました。だからこそ実現できた」と当時を振り返ると、会場の市民もうなずきながら熱心に聞き入っていた。

「聞く人はヤママン振り返る」と、会場

(坂本有喜)

【釧路 夕張】パネル展示やフォーラムを通して、炭鉱が培った文化を伝える交流企画展「炭鉱（ヤマ）のあるマチ」が12月から、釧路や夕張など道内外5カ所の現、旧炭炭地で同時開催される。国内の主要炭田を横断的に結び、日本の近代化を下支えした炭鉱の姿を検証する。

開催場所は釧路市立博物館（釧路炭田）、夕張市民会館（石狩炭田）、福岡県田川市石炭歴史博物館（筑豊炭田）、福岡県大牟田	市石炭産業科学館（三池炭田）、福島県いわき市石炭・化石館（常磐炭田）の5カ所。
各地域で活動する学芸員や郷土史家らがそ	それぞれの地域を担当。機械化の進んだ釧路や日本一の出炭量を誇った三池、温泉地にあり灼熱の炭鉱だった常磐など各地の特徴を中
	心に解説パネルををさる。
	2008年から、市石炭・歴史博物館を開き、共同企画展を開き、域間交流の実績が

釧路や夕張、大牟田…道内外産炭地

「ヤマ」が同時企画展

12月から
パネル展やフォーラム

夕張地域史研究会
調査張の青木隆夫室長
らが、他地域を見るこ
とで「地元」炭鉱をより
深く理解できる」と賛
同し、準備を進めてい
る。

大牟田市では12月4
日、他の4地域では12
月18日より、いす
れも来年2月13日ま
で、銅路は1月に各
地の研究が集まって
フォーラムも開催す
る。

（1）この企画展を道
内外5カ所で同時開催
するのは珍しく、石川
学芸員は、かつて炭鉱

▲ 10.10.27 北海道新聞

< 10.05.31 北海道新聞

は会社も労組も技術者も全国的に交流し学び合っていた。全国を統一的に見ることで、花形産業だった日本の石炭産業を再評価した」と話している。

ヤマの価値 再検証＊市立博物館 30日「聞く会」 10.05.19 北海道新聞

市立博物館＊炭鉱文化の保存を発信＊全国会議で９日に発表 10.06.04 北海道新聞

激動の時代のヤマ映す＊旧太平洋炭鉱の映画2本発見＊良好な保存状態 10.07.13 北海道新聞

釧路市博物館で「話を聞く会」＊労使が語るヤマの歴史＊協調の背景探る 10.09.07 北海道新聞

「労使対話で危機対処」＊第2回ヤマの話聞く会＊市博物館 10.09.24 北海道新聞

太平洋炭砒管理職釧路倶楽部＊炭鉱を観光資源に＊北のみらい奨励賞 10.10.13 北海道新聞

炭鉱マンの誇り OBが語る＊FMくしろ＊来月5日から新番組 10.10.29 北海道新聞

雄別炭砒の思い出聞く＊博物館で3回目ヤマの話 10.11.30 北海道新聞

「ヤマ自慢」準備着々＊全国炭田交流企画展 釧路で18日から 10.12.11 北海道新聞

国内外の炭鉱映画上映へ＊市立博物館＊ 18日から鑑賞申し込み 10.12.16 北海道新聞

全国6カ所の企画展＊炭鉱のあるマチ感じて＊当時の風景紹介 10.12.19 北海道新聞

＜ひと2011＞石川孝織さん＊全国炭田交流展を企画した 11.01.06 北海道新聞

炭鉱の記憶、銀幕に再生 23日、釧路で映画祭 11.01.23 北海道新聞

釧路＊「炭鉱文化」相互に理解＊道内外から研究者3人＊ヤマの特徴紹介 11.01.31 北海道新聞

福島の炭鉱技術者が見た道内炭鉱録 半世紀の時を越え釧路に 11.2.18 北海道新聞

釧路炭田の技術、盛衰、労使関係 * 元炭鉱マンの証言 一冊に * 市立博物館 11.03.26 北海道新聞

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む）

これまで各産炭地の博物館等は、繋がりがなかった、あるいは学芸員同士の個人的繋がりだけであったが、「全国炭田交流企画展」の開催を通して、館としての連携体制の構築ができた。この展示だけでなく、通常から資料の貸借、各地での関係行事や炭鉱文化記録化についての情報交換、課題解決への討議などが行われるようになった。また、日本石炭産業史のなかでの地域炭鉱史という捉え方を深化させ、研究のレベルアップを図ることができた。今後も今回の支援事業で構築された基盤を活用して、交流を深化させネットワークのさらなる強化を図りたい。

「ヤマの話を書く会」の開催は、これまで多くなかった当地域の石炭産業に関するオーラルヒストリーの収集を行うことができた。内容を記録集としてまとめることで、博物館の知識資産となるだけでなく、広く地域や世代を超え、日本唯一となった当地域の炭鉱を理解する上で重要な資料の集積ができた。先に述べた博物館連携により、筑豊炭田の炭鉱経験者からみた当地域について寄稿をいただき、他産炭地との差異や優れた点などを明らかにできた。これは、釧路炭田の研究史上でも特筆すべきことである。

博物館という舞台に伝えたい人びと（経験者）を迎え、知りたい人びと（地域内外、年齢を問わず）が集うことを目標として、平成 21 年度文化庁支援事業より行ってきた。2 年間の事業により、それは大きな成果が得られたといえる。今後も石炭産業だけに留まらず、さまざまな分野で、地域博物館の使命ともいえる地域連携による博物館活動を実施していくことが求められており、本事業でえられた手法をそれらに展開することも可能である。

<参加者の感想>

去る 1 月 30 日、釧路市立博物館で講演会を聞いた。道内外 6 つの炭田を紹介する企画展の関連行事で、展示も含めて道外の炭鉱の歴史・文化を知る貴重な機会になった。（中略）昭和 30 年代から相次いだ炭鉱の閉山。それから長い年月を経た今でも、その証を後世に残そうと活動する方が大勢いる。炭鉱のマチの人々にとって、日本の近代化を支えていた炭鉱は誇りであり、風化させてはならない大切な財産なのだ。今回のように各地の炭鉱研究者・関係者が交流し連携することが今後もあれば、それぞれの炭鉱マチに息づく歴史は一層長く、強く語り継がれていくだろう、と感じた。（釧路新聞「読者の広場」11.2.17 札幌市在住 40 歳代 女性）

太平洋炭鉱 OB の方々から、SD 採炭という新しい技術で海底採炭に挑んだお話や、他の炭鉱にはない労使関係のお話を聞き、現在日本唯一の坑内掘りの炭鉱として生き残っている理由がそこにあるように思いました。また昨年は雄別炭鉱閉山後 40 年でしたが、雄別炭鉱 OB の方々が当時の仕事のこと、生活のことなど楽しく生き生きと話されていたのが印象的でした。特に印象的だったのは「夢」として描かれた雄別炭鉱での採炭の設計図でした。今後は元炭鉱マンに限らず、その家族や地域住民のお話もぜひ聞いてみたいです。（市内在住 40 歳代 女性）

記録集を拝読し感銘を受けました。世界一の機械化炭鉱と言われた太平洋炭鉱、その生成過程の苦悩は私ども部外者にはこれまで到底窺い知れないものでした。「クズ」と呼ばれたはぐれ部隊？が社内一の優秀部隊に変身。まるでドラマそのものです。また、日本の炭鉱で唯一鉱員と職員が一緒に労働組合であったこと、その現実を労働組合委員長と会社幹部との鼎談で明らかにしてくれました。労使双方の視点は異なるものの「ヤマを守る」の共通点は一致していたようです。創業以来 82 年、日本最後の炭鉱としてその役割を果たし、釧路コールマインに後を託した太平洋炭鉱。その誇りと絆は立派に生きている。との感慨を新たにしました。次第です。また、雄別炭鉱のお二人が語られた「夢」にも共感を覚えました。（市内在住 70 歳代 男性）